

港区地域情報

## 名古屋港内にもあった飛行場

今では飛行場と言えば、中部国際空港ですが、戦前から戦中にかけて、港区にも飛行場がありました。

記録によれば、昭和九年七月三日に逓信大臣ていしんの許可

を得て、十号地内南側しおなき（現潮凧町）に約三十三万平方

メートルの「名古屋国際仮飛行場」が開設され、同

年十月一日から日本航空輸送株式会社にほんこうくうゆうそうの東京・大阪定期便が、一日一往復寄航したとされています。

この飛行場は、十一号地（現空見町）に「名古屋国際飛行場」ができるまでの仮飛行場でした。

事の発端ほったんは昭和四年よねん。当時の航空輸送の発達はったつを見た

名古屋商議所なごやしやうぎしよが、民間定期空路誘致みんかんでいきくうろゆうちのための飛行場を、

総理大臣ちんじやうに陳情ちんじやうしたことに始まります。その後、昭

和七年しちに、名古屋市、名古屋商議所と逓信省航空局ていしんが

協議した際、航空局から「十一号地埋立による新飛行場建設には五年かかるので、仮飛行場が必要」との意

見が出されます。そこで、当時、埋立てがほぼ完了していた十号地に、昭和十三年九月までの期限で、仮飛行場を開設したのです。ところが、十一号地の埋立工事は、着工ちやうこうが二年後の昭和九年、完了くねんが昭和十五年七月と遅れに遅れ、仮飛行場の使用期間も延長されません。結局、十一号地の飛行場の使用開始は、対米戦争開戦直前の昭和十六年十月になりました。

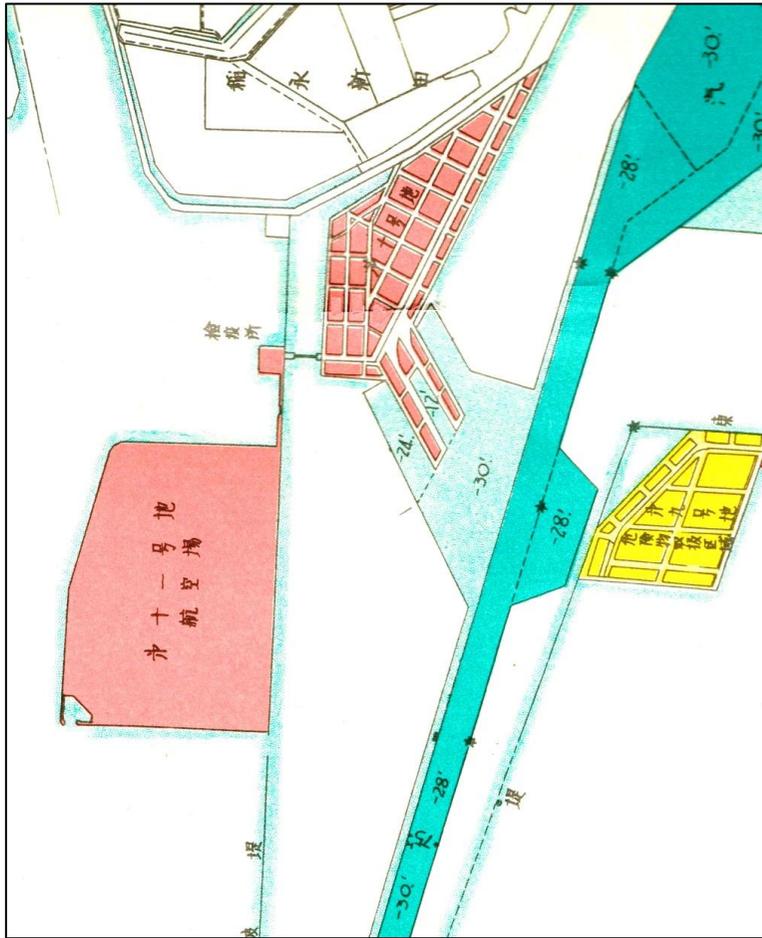
その頃、当初の目的だった民間定期空路は、昭和十五年十月で廃止されており、新制※2「名古屋国際飛行場」は、終戦まで愛知時計電機等に軍用機の試験飛行場として使われただけでした。なお、その間かん、昭和十九年一月に、豊山町に小牧飛行場ができています。

### 主な参考文献

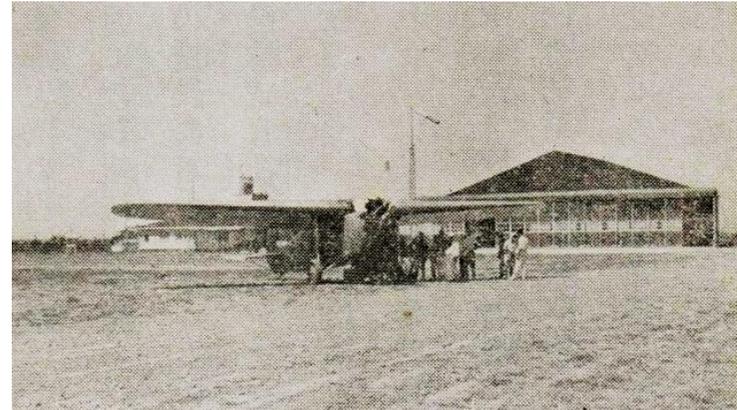
- 『あいちの航空史』中日新聞社会部編 中日新聞社 一九七八年
- 『名古屋築港誌』奥田助七郎著 名古屋港管理組合 一九五三年
- 『大正昭和名古屋市史』五巻 金融交通篇 名古屋市 一九五四年
- 『港湾と愛知縣』港湾協會第十回通常総会愛知準備委員会 一九三七年

※1 昭和十三年大日本航空(株)に統合、終戦で消滅。戦後の日本航空とは無関係。

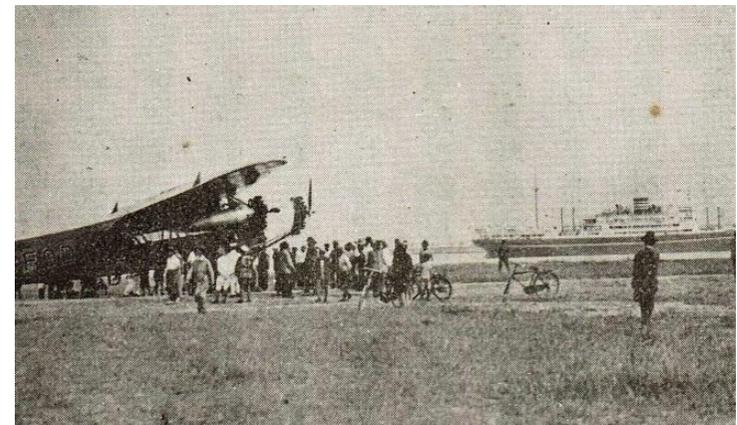
※2 九九式艦上爆撃機、零式水上偵察機等を開発。昭和十八年に航空機部門が愛知航空機(株)として独立。現愛知機械工業。



「第四期工事計画」に載った十一号地航空場



十号地仮飛行場 『大正昭和名古屋市史』第5巻より



十号地仮飛行場 『港灣と愛知縣』より